

平安朝における念仏信仰の展開

——往生伝を中心に——

早苗 憲生

平安朝における念仏信仰の實際を窺うにはまず、日本往生極楽記、続本朝往生伝、拾遺往生伝、後拾遺往生伝、三外往生伝、本朝新修往生伝等に記載されている修行者の信仰に注目しなければならぬ。この六種の往生伝には往生極楽の宣告と聖衆来迎の奇瑞をひたすら待ち望んで修行している願生者達の期待と苦悩の姿が描かれている。そこには平安中期から末期へかけて、凡そ二百年間の念仏信者の行蹟が記されているが、その間に念仏信仰がおのずから変遷していることが知られる。

さて、念仏には観念の念仏と称名念仏とがあり、前者は絵図・仏像に対して浄土の莊嚴、仏の相好を憶念するのであり、後者は専ら阿弥陀仏の名号を唱えるのであるが、保胤は「口唱名号、心観相好」（極楽記序）と語り、修行者達は臨終の行儀を重視し、最後に聖衆来迎の奇瑞を感得することを願っていた所から、畢竟は観念に重点がおかれていた。然も、念仏の一行に依つて往生を遂げた者は僅かで、大半は念仏と經典の説誦・書写、造寺、造仏等の他の行業を兼修していた。亦、念仏によらない往生も可能とせられていた。それは自らの所修善根に依つて往生極楽を賈い取るといふ功德主義に立脚した信仰に基づく。従つて、念仏によらなくても、善根功德が莫

大であると思われる他の行業を修することに依つて極楽に往生することができると信ぜられていた。そこで、かかる功德主義的信仰に立つて、念仏を数えて一万遍、十万遍、百万遍、それ以上を唱えた者、念仏の数を小豆で数えて三十五石も唱えた者等、所謂、念仏の数量に依つて往生極楽を期した者がいた。

善根を修し、功德を積むという功德主義に立つた信仰では富める者は多くの資財を傾けて、造仏、写経をし、法会等を設け、数多の善根功德を積むことができたが、貧者や愚癡の者、不善の徒は救済される余地はない訳であるが、このような善根功德を積まない輩も首尾よく極楽に往生することのできた例もある。安部時延は「不論日夜偏唱念仏。不記遍数」といい（後拾中）、紀吉住は「身無善根。家無財産。唯除寢食之外。淨与不淨。常唱弥陀。念珠置而無具。遍数計而不記」といわれ（後拾上）、念仏の数量の多寡にかかわらず、ただ明け暮れ念仏を唱えて往生を願つて往生した。また、高声に念仏を唱える者がいた。能円は千日講結願の日に「合掌観念。高声念仏而遷化」したといひ（続本朝）、武元は「曉夕唱仏号。其声高大。聞于鄰里。云々往還之者。莫不隨喜」といふ（新修）。この高声念仏について、往生要集上之末に大興經日藏分を引き「大念見大仏。小念見小仏。大念者大声称仏也。小念者小声称仏也。云々唯須勵声念仏三昧易成」と言つて、本来は三昧発得に主眼がおかれた信仰である。更に、臨終の十念、或は一念によつて往生を遂げる者がいた。聖全は臨終時「臨終十念。勝百年行業。吾慕其行。豈非此時乎」と語り（拾遺下）、源俊房は最後の念仏によつて往生することができたことを告げている（三外）。また、殺生を業として、一善をも修したことのない人や、強盜を働き罪科に処せられた者が今迄

の罪を悔い改めて念仏に帰依した例がある。源頼義は殺生を事としていたが、深く前業を悔い、多年念仏し（続本朝、源義光は武士の家に生まれたが、常に放逸無慙の業を懺悔し（後拾中）、強盜を働き、牢獄に投ぜられた奴袴君は今迄の悪業を愧じ、心を翻して念仏読経等の功徳を積んで往生している（後拾下）。かかる不善人が一度、心を発して今迄の罪業を懺悔した場合、全生命を抛つて仏道に精進する。そこに救済の念仏の意義があつた。然も、不善人往生の思想の流布にともない、念仏は諸行の中で、特に勝れていることが自覺されてきた。教真は「不専読誦衆経。只以念仏六万遍。為毎日之勤」していた（後拾中）。妙空は「縦雖散乱之心。念仏之功不虛歟」と語つて（三外）、積極的に念仏の一行を選択している点は注意してよい。以上の如く、臨終十念乃至一念、高声念仏が重視され、念仏が他の行業より勝れているとされたのは念仏のもつ滅罪生善の威力が莫大であると信ぜられていたからである。言わば、念仏の持つ呪的靈驗によつて、貧者、不善人は自らの罪障を滅し、往生の素懷を遂げたのである。

従来の功德主義的信仰に対して、念仏、読経、造寺等の功德を修する者の心的態度が問われるようになった。千観は「信心は深豈隔極樂上品之運云々」という夢告を得ている（極樂記）。これは善根功徳を積むという行為が信心に裏付けられていたことを物語つている。亦、源雅通は世事に引かれて、多くの罪業を作つていたが、常に法華經提婆品中の「淨心信敬」の文を口実にしていて往生した。

そして、貧しい一老人は「汝更勿歎。只直心念仏。必往生極樂。近則左近中将雅通朝臣。只以直心持法華。故不作善根。既得往生」という夢告を得て心強く思つていと語つた（拾遺中）とある。これ

平安朝における念仏信仰の展開（早苗）

は善根を作らなくても、直心に念仏を唱えたならば往生できることを伝え、祥運は「一日夜間、至心念仏」し、相助は「偏勤念仏。至心不退也」といわれ、永助は「発淨心念仏」し、良範は「弥以信心精進。念仏不退」であつた（以上三外）という。更に、三善為康は拾遺往生伝の序で「質直之心。往生之門也」と記している。それ故に、拾遺往生伝、後拾遺往生伝に記されている修行者達の性質は「只正直慈悲彼人之天性也」「其性質直、其心柔和」といわれるように、正直、質直、慈悲をもつて願生者の天性であるとしている。かかる傾向は後に編纂された三外往生伝、本朝新修往生伝に継承されている。然も、為康は猶子、行康が「出家持戒可協法器歟如何」と尋ねた所、「往生極樂可在信心。不可必依出家。念仏功積。畢命為期。十即十生。百即百生矣」と答えた（新修）。この為康の言葉は形式的な出家の功德に対する批判であり、信心をもつて念仏すれば往生極樂の素懷を遂げられると明言したのである。上記の修行者、特に拾遺往生伝から本朝新修往生伝へと時代が下がるにつれて、そこに記されている修行者は従来の出家、善根功徳の形式性を否定して、仏道修行者の心的態度に往生極樂の因を求めるようになった。それは信心、直心、至心に裏付けられた念仏であり、往生人の心性はすべて慈悲、質直を体とすると考えられ、遂に、定兼は「我願乘仏願力。欲到淨土」（新修）と言ひ、往生極樂は自らの念仏だけでなく、仏の本願力によつて決定することが認識せられるようになった。

法然上人が本願念仏への帰命を表明するに至つた思想的背景には平安末期に旧来の仏教、功德主義的信仰の在り方を批判し、精神的救済を訴えた往生人の一系譜があつたことを見逃してはならない。